

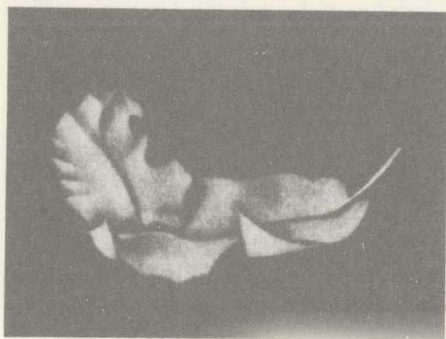
みのむし

山本三鈴



みのむし

山本三鈴



みのむし

© 1981
Printed in Japan

一九八一年二月一〇日 初版発行
一九八一年二月二五日 再版発行

著者 山本三鈴

発行者 清水 勝

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二
営業 電話 〇三―四〇四―一二〇二
編集 〇三―四〇四―八六一一
振替口座(東京) 〇―一〇八〇二

印刷 暁印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

落丁・乱丁本はお取替いたします

目次

みのむし

5

われた手鏡

87

装画 斎藤カオル

みのむし

みのむし

窓の下を、五両編成の私鉄電車が通りすぎていった。

茶ダンスの中で、食器やガラス器などがひそやかな音をたてる。天井からさげられている螢光灯の丸い笠も揺れていた。

じゃこうもみじの徒長枝をつんでいた剪定鋏の手をとめて、聖子は壁の時計に眼をやった。いま行ったのが、下りの最終電車だったことを確かめる。上りはすでに終わっていた。

聖子はほんと、肩で息をついた。上り下りそれぞれの最終電車が通りすぎてしまうと、一日が終わったという実感が持てる。この時間になれば、ほとんどの家が寝静まってしまい物音がしなくなる。

聖子の住んでいるアパートは、私鉄電車の線路際に建てられていた。そのために電

車の通過のたびに、家具や調度品が揺れるのだった。線路際とはいっても、少し高くなった台地にある。他人が想像するほど、揺れがひどいわけではない。聖子は揺れにはもう馴れてしまっていた。しかし騒音だけはどうにもならなかった。窓を開け放す時季になると、防ぎようのない騒音にいまだに馴染めないでいるのを知る。

アパートは、木造モルタルの二階建てであった。各階四部屋、八世帯が住んでいる。住人同士の付き合いは、ほとんどないようだった。塵芥収集日の掃除当番がまわってくると、隣室の初老の女が知らせに顔をだす。はっきりと顔を知っているのは、その女ぐらいだった。通路や階段で顔があれば目礼するていどで、聖子にはその相手がアパートの住人かどうかもしっきりしなかった。

聖子の部屋は、二階の一番奥にあった。東側の窓の下を線路が走っている。高台のために、部屋は実際には三階か四階ぐらいの位置になる。

——いまだき風呂付きで、東南の角部屋なんて掘り出しもの、めったにないですよ。この部屋に案内してきた周旋屋はいった。

——線路際じゃねえ。

——昼は勤めに出てるんですよ。夜は電車は通んないんだから、睡眠のさまたげには

なりませんよ。

幾分ためらっていた聖子を、周旋屋は馴れたようすで説得にかかる。多少の騒音もすぐ気にならなくなるといった。

六畳に、三畳の板の間が台所というつくりだ。周旋屋のあとについて部屋に入った聖子は、まっさきにベランダを調べた。南向きの、予想をはるかに上まわる広さがあった。このていどの造りのアパートでは、普通は出窓ぐらいしかないのが常識とされていた。聖子はベランダに立って陽当りの具合を確かめると、すぐ契約することにした。思いもかけない拾い物をしたようで、気持が浮きたった。

建築後七年というのは、新しい方ではなかった。だがベランダがあったことと、最寄りの駅まで歩いて五分というのも気に入った。

スーパーマーケットの店員の給料としては、贅沢すぎる家賃だと同僚にいわれた。

——余計なお節介かしれないけどさ、あんた馬鹿だよ。風呂付きの部屋が欲しいんだったら、もっとずっと安いところ紹介してやったのに。

聖子は静かに微笑してみせただけで、何も説明しなかった。確かに安い部屋代ではない。けれども聖子は身なりにこだわるわけでもなく、店員仲間と誘いあって映画や

芝居、旅行などに掛けることもなかった。だから同僚がやきもきして心配してくれるほど、そのことを気にはしなかった。南向きの広いベランダがあるというだけでも、値うちは充分にあると思っていた。

以前のアパートは風呂もなく、便所も共同だった。そのことはいっこうに苦にならなかったが、陽当りが悪かったことと、ベランダがなかったことがつらかった。

聖子が盆栽をはじめてから、そろそろ四年になる。四年ぐらいでは、盆栽をやっていますなどといえる年季ではない。せいぜい手元にある植木を枯らさないように管理することで精一杯だ。陽の当らなかつたアパートで、大切にしていた朝鮮そろを枯らしてしまった。絶対に枯れないといわれていた四方伯もだめにしてしまった。何かに関心を持って、それを持続させるといふ経験のなかつた聖子は、二鉢を一度に枯らしたことで初めていいようのない切なさを味わった。

聖子が扱っているのは、俗に小品盆栽といわれるものだけだった。掌にのる大きさから掌上盆栽という呼び名もある。また掌にいくつものせられるほどのものは、豆盆栽とかミニ盆栽とかいわれていた。聖子はそれらの小物だけに限って蒐めていた。値がはることもあって、大物盆栽には興味がなかった。

盆栽をはじめるとなつたことに、聖子に具体的な動機があつたわけではなかつた。子供の頃から、小さな愛らしいものに惹かれる気質はもつていた。人形でも置き物でも、ことさら小振りのものに眼がいった。しかしそれだけのことだつた。小さなものをどこかで見かけると、可愛いと感じるだけのことだ。特別に執着するわけでもなく、自分も蒐集してみようとすることもなかつた。

聖子はなにに対しても、きわめて関心が薄く執着のないほうだつた。衣服でも履物でも、身につけられればそれでよかつた。

——そのネックレス、くんない？

病院の雑役婦として働いていた頃、聖子にそういつた女がいた。同じ職場の配膳婦だつた。聖子は入院患者にもらつたばかりの、金のネックレスを女にやつた。

——あたしがこれもらつたからつて、あんた施しものしたみたいな顔はしなさんなよ。聖子は驚いてその女の顔をみた。欲しいといつたから渡しただけだ。女がいうような考えなどもつていたわけではない。

——どうしてそんなふうにいるの。

——念の為だよ。あたしは恩を売られるのが大嫌いだからさ。そうはいつても、あん

たは他の連中と違って、余りなにかに執着するほうではなさそうだけどね。

男を奪られても黙って見過ごしそうなひとだよ、といった配膳婦の言葉に聖子は苦笑してしまった。

以前のアパートにいた頃、普段通らない街を散歩していて、偶然に盆栽店の前に出た。大きなビルの裏通りに面した側に、その店はあった。一杯飲屋と喫茶店にはさまれていた。パン屋、鳥肉店、レコード店などの雑居ビルは、聖子には盆栽店があるのにふさわしい環境とはみえなかった。そのことが聖子にはめずらしく、興味をそそられた。一方通行の狭い道路に面した盆栽店だけが、周囲の喧騒から取り残されたようにひっそりとしていた。

店先に置かれた木の台に、大小さまざまな盆栽が陳列されていた。聖子は誘われるように近づいていった。雑壇になった台の上には樹高八十センチぐらいのものから、せいぜい親指の頭ほどしかないものまでが、所狭しと並べられている。灌水がすんだばかりとみえ、それぞれの植木の葉先に雫がついているのが可憐な風情をみせていた。鉢の口径が一センチぐらいのものもかなりあった。はぜ、石菖、さんざしなどはわかったが、その他のものは名前がわからない。

聖子は豆盆栽の前にしゃがみこんでいた。

———
— どうですか。いいもんでしょう。

頭の上で声がした。振り仰ぐと、五十年輩の大柄な男が柔和な微笑を浮かべて聖子の横に立っていた。

———
— いじらしいほど、可愛いですね。

思わず聖子は素直な感慨を口にした。

———
— おひとつ、どうですか。

さりげない口調で男はいった。

———
— ええ、でも……。

ためらっている聖子を男は、まあとにかくお入りになりませんか、と店の中へ誘った。アスタイルの張ってある広い店内の片隅に、幾種類もの鉢を飾ったガラスケースがあった。その前に赤茶色のニスを塗ったような、太い幹の飾り物が何本も置かれている。あきらかに根の部分とわかるものや、枝をつけた幹の部分のそれらは、前衛的な彫刻のようにみえた。

———
— それ、杜松なんですよ。素晴らしい形をしているでしょう。

造形の美しさと力強さにみとれていた聖子に、男はいった。

店の奥は一段高くなり、横長の六疊になっている。その手前寄りの中央に炉がきつてあり、自在鉤がさがっていた。鉄瓶がかけられ、湯気がたちのぼっている。

——炉の縁も、この床柱も全部杜松でつくってあるんですよ。

男は座蒲団を出してくると、自慢気にひとつひとつをさしめして説明してくれた。一間の床の間も杜松だという。杜松という名をこのとき初めて聖子は覚えた。

——炉だの自在鉤だのも、あなたにはめずらしいんじゃないかな。

茶を淹れてくれた男は、聖子を試すような眼でみていった。

——いいえ。子供の頃住んでいた家にありましたから。

——ほう、それはそれは。で、どちらなんです？

聖子は男の質問には答えず、店先に眼を向けた。盆栽に西陽があたっていた。

——盆栽ってむずかしいんですよ。あたしでは、すぐに枯らしてしまいうさだわ。

すすめられるままに茶を飲みながら、聖子は当惑したようにいった。請じ入れられるままにうかうかと店の中に入り、茶まで出されて聖子は後悔していた。お愛想にでもひとつぐらいいは買わないことには、帰ることもできないと思いはじめていた。